

令和6年度

一般入学試験A日程 学科試験問題

国 語

1. 試験時間は、60分間です。
2. 問題は、この冊子の1～18ページにあります。解答用紙は別に3枚あります。
3. 解答は、解答用紙の問題番号に対応した解答欄に記入してください。
4. 問題や解答を、声に出して読んではいけません。
5. 印刷の不鮮明、用紙の過不足については、申し出てください。
6. 問題や解答についての質問は、原則として受け付けません。
7. 終了の合図があったら、すぐ筆記具を置いて、解答用紙を机の上に伏せてください。
8. この問題用紙は、持ち帰らないでください。
9. 不正な行為があった場合は、解答をすべて無効とします。
10. 答案の文字は、ていねいに、かつ明瞭正確に書いてください。
11. その他、試験の進行については、監督者の指示に従ってください。

植草学園大学 発達教育学部

受験番号		氏名	
------	--	----	--

第一問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

1 知識は伝わらない

多くの人には「知識なり、技能なりは伝えることができる」という信念があると思う。先生なり師匠なりが、何らかの適切な方法を使えば、彼らの中にある知識、技能が、生徒、弟子に伝わるはずだ、と考えている。つまり、知識は持ち運んだり、誰かに渡したり、誰かから受け取ったりできることを意味する。実際、何かを教わってできるようになった経験は誰にでもあるだろうから、知識は受け渡しが可能であると考えてる人は多いと思う。

こうした信念の表れは「図書館は知識の宝庫だ」、「本は知識の泉だ」などという言葉にも表れている。書籍には先人が発見した、獲得した知識が記載されており、それを読むことで知識が得られると考える。また学校では知識や技能を教えると言われる。先生は教科書を使い、さまざまな事柄を教える。漢字の読み方、北斗七星の現れる場所と時期、因数分解の仕方、^注ブレトン・ウッズ体制、さらには給食の食べ方まで、いろいろな種類、構造の知識を伝えようとして努力されている。これは知識は誰かから誰かへ伝わると信じているからだ。

ところが、残念ながらそうではない。書物は知識を文字に表したものであり、それ自身は知識ではない。「リング」という文字、言葉が、本物のリングではないのと同じことだ。だから書物を読んでも、そこから知識を得ることはできないのだ。それが表すのは「情報」であり、もしそれを覚えたとすれば「記憶」となる。同様に、先生たちは知識を教えているのではない。それは右の例と同じ理由だ。先生が伝えるのは情報で、運良く生徒がそれを覚えればその生徒の記憶となる。しかしそれらは伝えられただけであり、もしそのままならば単に記憶、情報としてとどまるだけなのだ。

2 知識の3つの性質

ここまで読んでこられた読者は、「お前の言う知識とはなんなんだ」と言いたくなると思う。伝統的な哲学では、「正当化された、真なる信念」と言われる。キーワードが3つあり、それが知識の3つの条件となっている。第一に、「真なる」という言葉が示すように、それは真、つまり正しくなくてはならない。第二に、「信念」というわけだから、それを信じていなくてはならない。そして最後に、「正当化された」とあり、それは真である根拠が存在するということである。

ただ私はここでそういう知識を取り上げたいわけではない。有用な知識について考えてみたいのだ。役立つ、意味のある知識といってもよい。というのも、右の定義で言う「私の目の前のクレジットカードの上にUSBメモリーがある」というのも知識になるからだ（証拠として写真を載せてもいいのだが、インクの無駄になるのでやめておく）。これは私以外の人にはなんの役にも立たないし、意味もない。つまり、有用ではないからだ。

さて別の本（拙著『教養としての認知科学』東京大学出版会）に書いたことだが、有用性を持つ知識というのは、以下に述べる3つの性質を持つていなければならないと思う。1つめは一般性である。一般性とは簡単に言うとなら

という性質を指す。ウガンダの首都は多くの日本人にとって使う場面はほとんどない。せいぜい早押しクイズのような場面でしか使えない。そうしたものは一般性を持つとは言えない。重力加速度が $9 \cdot 8 \text{ m/s}^2$ ということを覚えるだけであれば、小学生でもできるだろう。しかしそれは知識ではない。それを用いて考えることができな

もう1つの性質は関係性である。孤立した知識はほとんど何の役にも立たない。知識というのは他の知識とリッチな関係を持つていなければならない。昔日曜日の朝早く電車に乗っていたら、これから塾に行く小学生たちが、「イワンの馬鹿」、「トルストイ」、「赤と黒」、「スタンダール」などと言いつつ合っていた。これは本当に意味がない。イワンの馬鹿がどんな小説であり、トルストイがどんな人物であるのか、どんな時代に生きたのか、なぜトルストイはそんな小説を書いたのか、原題となったものは何か、そういうことが繋がらなければ、クイズ王くらいにしかなれない。

最後は場面応答性である。知識はそれが必要とされる場面において発動、起動されなければならないというのが場面応答性である。重力加速度についての知識は、それが必要となる場面で、例えば落下物体の速度を求めるという場面で起動しなければなら

3 知識の構成主義

このように知識を捉えようと、ある事柄が伝えられた途端、知識として定着することは原則的にないことが容易に理解できるだろう。伝えられた事柄、本で読んだ事柄がどのような範囲をカバーするのか、それは他の知識とどう関係するのか、そしてどこで使われるのか、そうしたことを考える作業を行わない限り、その事柄は単に記憶としてしか存在せず、知識とはならないのだ。

^B「こういう考え方を構成主義 (constructivism) と言う。相手からの情報、その記憶が知識となるためには、それらの素材を用いて知識として構成していかなければならないのだ。構成するのはもちろんあなただ。あなたのこれまでの経験は人と異なるだろうし、これから出会いそうな場面も異なるだろうから、構成される知識は人によって少しずつ異なってくる。より多くの関連した知識と結びつきを作ったり、その知識がカバーする事柄をたくさん経験した人が構成する知識は、単にクイズのように覚えた人のそれとはまったく異なったものとなる。難しい言葉で言えば、知識というものは「属人的」なものなのだ。

いくつか補足しておきたい。「自分で考えて」と言ったが、それは何も意識的に考えることだけを意味するわけではない。第5章で詳しく述べるが、私たちには無意識の働きというものがある。^Cこれが勝手に、それまでに貯えたいろいろな他の知識との結びつきを作ってくれるし、それが働く場所も勝手に見つけてくれる場合も多々ある。頭を抱えて「この知識はどこで使えるのだ、他とどんな関係があるのだ」と悩まなくてもよいことも多い。そういう意味で「知識は創発する」と言ってもよいだろう。

もう一つは伝えられたことについてすぐに「なるほど」と思えるようなケースについてである。この場合は、伝えられた情報、あるいはその記憶から知識を構成するために十分な経験や関連した知識が存在している。だから努力している人へのアドバイスは、すぐに伝わるように見えるのだ。ちなみにこうしたことが自動的に行われる経験が、知識が伝達可能であるという信念を支えているのだと思う。一方で何もやっていない人には、同じことを言っても何も伝わらない。せいぜい記憶にとどまるだけだ。

最後の一つは、では記憶はなんの意味もないのか、ということについてである。それは「ある」、というか「ある時もある」というのが答えだ。さっぱり経験のない段階で何かのことを教わっても、ほとんどそれは意味がない。しかし、あなたは成長する、経験を重ねる。こうした段階になると、昔はちんぷんかんぷんだったことが意味を持つようになることがある。だから情報の伝達、その記憶が意味がないというわけではない。

子供も含めた学習途上の人間が知識を作るなどという大それたことなどできるはずはないと考える人たちはたくさんいると思う。しかし、そうではないことは人間の歴史が証明している。未知の問題を解決しようと努力している科学者たちは、その途中では誰も解はわかっていない。解決に必要な知識も十分ではないというか、何が必要な知識かもわからない。しかし集団の力でそれを作り出してきたのだ。同じことはより小さな組織、学級、会社などにおいても実際に起きている。だから子供は成長するし、会社は事業を続けるし、人類は進歩する。ここでは^オ協働、つまり集団の力というものが大きい。

(鈴木宏昭『私たちはどう学んでいるのか』より)

*出題の都合上、原文の一部を改変してあります。

注 第二次世界大戦の反省から貿易の円滑な発展を促すために結ばれた協定

問 1 傍線部ア～オと同じ漢字を用いるものを、それぞれ次の 1～4の中から一つ選びなさい。

- | | | |
|----------|---------|----------|
| ア | イ | ウ |
| 1 テキ当な性格 | 1 ギ式に参列 | 1 タン水の交り |
| 2 テキ要を記す | 2 生徒会会ギ | 2 タン鍊を積む |
| 3 テキ国と戦う | 3 大学の講ギ | 3 タン力がある |
| 4 点テキをする | 4 ギ性になる | 4 タン正な顔立 |

- | | |
|----------|----------|
| エ | オ |
| 1 時代の風ゾク | 1 キヨウ同浴場 |
| 2 楽団に所ゾク | 2 キヨウ権発動 |
| 3 武士の一ゾク | 3 一致キヨウ力 |
| 4 会社に勤ゾク | 4 キヨウ味津々 |

問 2 空欄 Aに入れるのに最も適するものを、次の 1～4の中から一つ選びなさい。

- | | |
|---|-------------|
| 1 | 時が経っても変わらない |
| 2 | いろいろな場面で使える |
| 3 | 常識の範囲の中で正しい |
| 4 | 特別でなくごく当たり前 |

問3 傍線部B「こういう考え方」として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 「その人自身の中に各々異なる意味を構成すること」が大事だとする考え方
- 2 「多くの知識を偏りなく集めて意味を構成すること」が大事だとする考え方
- 3 「伝えられた情報をよく吟味し意味を構成すること」が大事だとする考え方
- 4 「記憶できるようにくり返して意味を構成すること」が大事だとする考え方

問4 傍線部C「これ」は何を指しますか。十字以内で抜き出しなさい。

問5 筆者の考える知識として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 運転免許を取得しようと考えて、ブレーキやアクセル等の名称を記憶する。
- 2 歴史上の出来事と年号を覚えやすくするために、語呂合わせ等を工夫する。
- 3 三角形や長方形の積の公式を基に、平行四辺形の積の公式を創発する。
- 4 画数が多い複雑な難しい漢字でも、繰り返し書くことによって理解する。

問6 筆者は、知識とはどういうものだと考えているか六十字以内で述べなさい。ただし、次の語を必ず使用しなさい。
使用する語 (一般性・関係性・場面応答性・記憶・経験)

第二問 次の文章を読んで、後の問い（問1～5）に答えなさい。

「皆さま、本日はお忙しいところご足労いただきまして、誠にありがとうございます。これまで長年にわたり文筆の仕事に携わって参りましたが、出版記念パーティーなる晴れがましい会をもちましたのは今回が初めてです。なぜ、今回にかぎってこんな分不相応を思いたったのか。疑問をおもちの方もおられるでしょうが、じつは、このたびの新刊は、この三十余年のあいだに私が携わってきた評伝、教育本、対談集、共著、子どもむけの啓蒙書などをすべてひっくるめまして、五十六冊目の刊行物となるのです」

五十六。その中途半端な数字をあげた瞬間にふくれた吾郎の小鼻を見て、一郎は背中にぞくつと悪寒を走らせた。じいちゃん、まさか。

悪い予感的中した。

「勘のいい方はもうお気づきでしょうか。五十六冊、五十六、五、六、ゴロ、ゴロ、吾郎……ふ、ふ。ふ。ふ。ふ。」

もはや抑えきれぬとばかりに盛大に吹きだし、腹を抱えた吾郎の肩が下へ、下へと沈んでいく。

まさかこの晴れの舞台で一人笑いをやってのけるとは。立ちくらみをおぼえる一郎の横で、露子が「お父さん……」と額に手を当てた。肩の震えが止まらない吾郎とは対照的に、駄洒落のために招待された来賓たちは硬直した氷像と化している。

しかし、笑うだけ笑った吾郎はそんな空気をものともせずに、再び悠然と語りだした。

「しかしながら、その五十六冊目の刊行物が、私の初の自伝本であったことに、なにかしら運命のようなものを感じたのもまた事実であります」

千葉進塾の立ちあげ。その揺籃期と成長期。文部省との対立と歩みより。自伝本でたどったアにさらりと触れたあと、吾郎は話を塾業界の現状へ転じた。

「皆さんもご存じのとおり、塾産業は目下、きわめて厳しい冬の時代をむかえています。小学生の数は二十年前のおよそ七割、中学生は六割。この少子化時代を生きのびるのは並大抵のことではありません。しかし一方で、かつてなかった新たな

可能性がこの業界に芽吹いている側面もあります」

しわがれた低声ながらも、長く教壇に立っていた吾郎の語りには独特の抑揚と律動があり、聞く者の耳を引きつける。語ることにつれて来賓たちの氷は溶け、場内の温度は再びぬくもっていく。

「すでに報じられていることですが、今年で創設四十六年目となる千葉進塾は、この春から行政^イによる公立学校での土曜日授業を開始しました。塾と文部省がいがみあつてきた過去を思えば、まさに隔世の感、アメリカとロシアが共同で宇宙開発にでものりだしたような珍事とも申せましょう」

そのとおり！ 会場の一角から声が飛び、笑いの波が立ちのぼる。

「しかしながら私は、この教育現場における官民連携の動きに賛同する者です。学校教員への負荷がここへ来てその限度をこえているのは無論のこと、この連携は塾側にとつても大いに益するものであると考えます。期待するのはかならずしも経営上の利益だけではありません。業界の皆さんには言わずもがなでしょうが、我々塾の人間というのは、すべての子どもに等しく勉強を教えられない現実、絶えずある種の^ウを抱えているものです。商売であることの限界が、喉に刺さった小骨……いや、ナイフのようにつきまとう。故に、塾の看板を負ったまますべての子どもと等しくむきあう場を与えてくれる官民連携のとりくみに、私は新たな光を見る思いがするのです。そしてまた……」

きよろきよろと場内を見まわす吾郎の視線が止まった。その焦点は一郎に結ばれていた。

「新しい教育の動きはそれに留まりません。私事ながら、私の孫とその仲間たちは今、経済的に不利をこうむっている子どもたちを対象とした勉強会を続けています。それを知ったとき、私は、自分がどうしても手をのばすことのできなかつた社会の暗がり、彼らが代わって手をさしのべてくれた思いがしたものでした。と同時に、ごく一部の子どもたちが人目を忍んで通塾していた四十六年前と、塾へ通わない子どもの方が少数派となった今と、その教育環境の劇的変化を突きつけられた思いもいたしました」

時代はめぐる。塾を始めた当初には当初の、今には今の教育をとりまく問題があり、それに全力でかかずらってきた人々がいる。その盟友たちの粉骨の一端を、この自伝本に書き留めることができたらとの願いをこめて筆をとった。

そんな執筆動機を語ったのち、吾郎はおもむろに声を落とした。

「じつは今日、お会いした皆さんから、私はなぜ本のタイトルを『みかづき』にしたのかと、口々に問われました。あえて言うほどのことではないと口を濁しておりましたが、^A恥をしのんで、ここで一度だけ申しあげます。このタイトルは、今は亡き妻を偲^{しの}んでのものです」

ざわりと、どよめきが会場を伝う。すでに自伝本を読んでいる者も、いない者も、かつて業界をにぎわせた大島夫妻のすったもんだを忘れてはいない。

「これまたご存じの方も多いでしょうが、私の妻は万事において烈^{はげ}しい女性でした。とりわけ、事が子どもの教育に及ぶと歯止めのきかない猪突猛進^{ちよつもうしん}ぶりで、その熱量に関しては、私は生涯、彼女に遠く及ばなかったと思います。塾長として千葉進塾を守った約二十年間のちも、彼女は塾の補習授業にしばしば顔を見せるかたわら、家では教育関連の書物を熱心に読みあさっていました。本の置き場がないと同居していた娘が悲鳴をあげるほど、朝も夕も本を手にかけていたようです。いよいよ読むものがなくなると、今度は古書店に顔のきく知人に頼み、過去の教育本を網羅しはじめました。ほどほどを知らない人でした。病に倒れての入院中ですら、彼女は教育とのつながりを死守するように、可能なかぎり枕もとの本をめくろうとしていたのです」

そういえば、たった一度だけ見舞ったときにも、祖母の枕もとには複数の本が積み重なっていた。壇上の吾郎を見上げる一郎の脳裏にその情景がよみがえる。

「ところが、亡くなる三日ほど前……私が最後に見舞ったとき、なぜだか妻の枕もとからは本が消えていました。そこにあったのは、幼い孫が描いた家族の似顔絵だけでした。読む本がなくなったのならば手配しようかと私が言うと、妻は妙にさばさばとした顔で、もういいのだと首をふりました。もう私、さすがに満ちるのはあきらめたわ、と」

常にしゃかりきに何かを追ってきた妻を、かつて自分は永遠に満ちることのない三日月にたとえたことがある。そんな断りをはさんで吾郎は続けた。

「それから、妻はこんな話をしました。これまでいろいろな時代、いろいろな書き手の本を読んできて、一つわかったことがある。どんな時代のどんな書き手も、当世の教育事情を^B一様に悲観しているということだ。最近の教育はなっていない、これでは子どもがまともに育たないと、誰もが憂い嘆いている。もっと改善が必要だ、改革が必要だと叫んでいる。読んで

も読んでも否定的な声しか聞かれないのに最初は「エ」したものの、次第に、それはそれでいいのかもしれないと妻は考えはじめたそうです。常に何かが欠けている三日月。教育も自分と同様、そのようなものであるのかもしれない。欠けている自覚があればこそ、人は満ちよう、満ちようと研鑽^{けんさん}を積むのかもしれない、と」

水を打ったようにしんとした場内に、エコーをおびた吾郎の言葉が泌みるように溶けていく。

「教育に完成はありません。満月たりえない途上の月を悩ましく仰ぎ、奮闘を重ねる同志の皆さんに、この場をお借りして心からの敬意を表します。また、今後も刻々と変容していくであろうこの日本社会で、官民を問わず、教育の欠落に立ちむかわんとするつわものたちの奮闘^{みらいえいごう}が未来永劫に継承されていきますように、その祈りをこめてお礼の言葉と代えさせていただきます」

満月たりえない途上の月。その光を皆が無言でふりあおぐように、吾郎の声がとだえた会場はひとときの静寂に包まれた。それが万雷の拍手に変わったのは、深々と一礼した吾郎が壇上を去る直前だった。

「いい会でしたね」

「大島先生らしいわ。来てよかった」

「しかし、よもや語呂合わせの記念パーティーだったとは……」

一様に笑みをたたえた来賓たちが三々五々散りはじめても、一郎は「オ」さめやらず、なかなかその場から動きだせずじまつた。

教育界の新たな波を見つめる祖父の心情や、闘病中の祖母の姿。初めて知ったそれらが胸をしめつける。じいちゃんはある気持ちでクレセントの活動を見てくれたのか。ばあちゃんは満ちるのをあきらめたとき、もしかしたら満たされていたのではないか。とりとめのない思いが浮かんでは消える。しまいには頭がヒートアップしたようにぼつぽと熱くなってきた。

(森絵都『みかづき』より)

*出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問 1 空欄ア～オに入る漢字として、最も適するものを、それぞれ次の 1～4 の中から一つ選びなさい。

ア				イ				ウ				エ				オ			
	1	奇跡			1	委託			1	慰め			1	辟易			1	笑い	
	2	顛末			2	注文			2	疲労			2	落涙			2	余韻	
3	結論			3	対立			3	鬱屈			3	興奮			3	発熱		
4	軌跡			4	改革			4	期待			4	同意			4	酔い		

問 2 棒線部 A 「恥をしのんで」の説明として、最も適するものを、次の 1～4 の中から一つ選びなさい。

- 1 亡き妻を偲んでいることに照れている。
- 2 夫婦不和を恥じている。
- 3 駄洒落が功を奏さなかったことを恥じている。
- 4 説明下手を詫びている。

問3 棒線部B「一様に悲観している」対象として、最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 理想に夢が追い付かない現実
- 2 改革が掛け声だけで終わる教育制度
- 3 塾と行政が協力し合えないこと
- 4 正しく教育を導く指導者がひとりもない事実

問4 棒線部C「満たされていた」の説明として、最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 三日月のつもりが実は満月になっていた。
- 2 満ちる為の研鑽の継承が教育の本質と納得した。
- 3 家族一同との和やかな関わりを実感できた。
- 4 教育者は悲しみに満たされるものと理解した。

問5 文中比喩に「月」を用いているが、大学での学習に対する抱負を、「月」を用いて百五十字以内で述べなさい。

第三問 次の文章を読んで、後の問い（問1～3）に答えなさい。

著作物使用許諾申請中のため省略